

論文

総合演習の研究（その2）

生野金三・豊澤弘伸・北村好史・中谷陽子・生野桂子

The Research of the General Seminar

SHONO Kinzo

TOYOSAWA Hironobu

KITAMURA Yoshifumi

NAKATANI Yoko

SHONO Keiko

I はじめに

「総合演習の研究」（その1）においては、総合演習の課題（教員を志願する者の実践的指導力の養成）を踏まえ、「総合演習の模擬授業の内容と方法」「総合演習の実践展開」「実践的指導力の基礎の育成をめぐる」等の項のもとに論を展開した。就中、ここでは模擬授業を導入して、前述した課題（実践的指導力）の探究を試みた。具現すれば、まず「総合演習」、あるいは「総合的な学習の時間」において最も重要視されている課題探究過程の様相について触れ、次いでその最初の段階に相当する「課題発見」の場面についての様相を実践的（模擬授業を導入して）に探った。課題発

見の方法としては、KJ法やウェビング法等があるが、今回はKJ法によって課題を焦点化していく方法をグループ毎に探究した。

以下に、「自国文化」をめぐる課題発見の様相を簡約する。具体的手順は、「1 まず、課題『自国文化』に関する心の働き（関心のあること、問題としていること、必要なこと等）を個々でカードにマジックで記す。」「2 そして、それを予め黒板に貼付された『自国文化』（カード）の周りによく考えて貼付する。」「3 貼付後、皆で検討を加え、内容のまとまり毎に見出しを付ける。」の通りである。

斯様なことを踏まえて受講生である学生はグループ毎に課題発見の作業に着手し、その結果を模造紙にまとめる。そして、課題発見の過程を他のグループと共有するため、まずは課題発見の過程の様相を振り返り、それを基盤に発表原稿を作成し、次いでグループ毎に発表するためのリハーサルを行う。その後、発表し合っ課題発見の過程を相互に共有する。斯様にして受講生は、課題発見の様相を体得するであろう。

その様相を受講生の「『総合演習』のポートフォリオ」より見てみる。

〈略〉以上が私たちが検討した「自国文化」についての課題発見の過程です。実際の「自国文化」を内容に整理する作業をして、昔も今も変わらず「自国文化」に親しまれている事に気がきました。こうして「自国文化」を大切にしていきたいと思いました。

これは課題発見の実践例の一端であるが、いずれも各グループで、共通の課題（自国文化）をめぐる個人的関心事を基盤に如何に課題を探究していったかその過程に触れている。そして、一連の作業を通して受講者である学生は「自国文化」の重要性を改めて認識している。斯様な全体の共通テーマ（自国文化）のもとにグループで如何にそれを焦点化していくかという課題発見の過程を受講者である学生に体得せしめることは、教員に求められている資質能力を育成する観点より見ても極めて重要なことである。斯様なことに鑑み、本論では「整理・発表」の場面の様相を模擬授業を通して探ることを目的とする。換言すれば、「自国文化」というテーマ

のもとに模擬授業を実践し、それを基盤に実践的指導力について探ることを目的とする。

Ⅱ 総合演習の実践展開

1 課題探究過程の様相～「整理・発表」の場面～

ここでは、課題にしたがって探究した内容を整理し、発表するのが主たるねらいである。特に今回は、授業を受ける学習者（受講者である学生を児童役と見立てて）に模擬授業を個々人で行う立場より整理する。それに当たっては、まず対象となる学年を決め、そして学習指導案を作成し、模擬授業の具体的準備（ワークシートの作成、板書計画、発問計画、教材の作成等）を行う。学習指導案の作成の仕方については、課題の探究が終了した段階で解説を加える。特に、ここではどんな目標のもとに、どんな単元（内容）によって、どの段階まで学習者（受講者である学生を児童役に見立てて）の思考を深めるかを念頭において授業の諸準備に着手するようにする。

2 模擬授業を導入した実践

以下に、受講者である学生が模擬授業を行うに当たって、如何なる準備を行ってきたかその様相をまず挙げ、そしてそれぞれについて考察を加える。次いで、その実践例の展開の様相の一端を挙げる（授業記録によって）。更に、模擬授業によって受講者である学生が実践的指導力の基礎を如何に学んだかについても触れる。

(模擬授業を行うに当たっての準備状況)

(授業者Kのその1, 授業者YとWのその2)

【授業者Kの準備状況】

①学習指導案 (その1)

第6 学年 総合的な学習の時間の学習指導案

指導者 K

1. 単元 豆腐について調べよう

2. 本時 (2 / 2)

- (1) 目標 豆腐の発祥から現在に至るまでの歴史を追い、豆腐がどのよう
に日本人の食文化に浸透してきたか、その背景を探ることに
よって、先人の知恵や思いを理解する。
- (2) 準備 資料プリント、ワークシート、紙芝居、模造紙、短冊、挿絵
- (3) 実際

過程	主 な 学 習 活 動	時間	教 師 の 支 援
導入	1 前時の学習を振り返る。 ・豆腐の歴史(発祥・伝来)についてワークシートを用いて確認する。 2 本時の学習の目当てを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <今日の目当て> とうふの由来や栄養について学習しよう。 </div>	5分	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートの穴埋めの解を問うことによって、前時の学習のポイントを復習させる。その際、前時に配布した資料を音読させる。 目当ての短冊を提示し、音読させ、そしてそれをワークシートへ記入させることによって、本時の学習への意識を高揚させる。
展開	3 資料プリントを基に、豆腐の名前の由来と豆腐の栄養を理解する。 ・資料を読み、ワークシートにまとめる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> 由来:「豆腐」=「やわらかい豆」 栄養:大豆は「畑の肉」と言われるほど、多くのたんぱく質を含む。 </div>	35分	<ul style="list-style-type: none"> 音読をさせた後、由来については「腐」の語源から、栄養については大豆を喩えた言葉(「畑の肉」)からそれぞれそのポイントを理解させる。その際、食品を喩えた言葉の理解は、カキ「海のミルク」、アボガド「森のバター」等を提示し、それを手掛かりとさせる。

	<p>4 提示された模造紙資料(豆腐に関するアンケート結果)から、日本・中国・韓国の人々の豆腐に対する思いを考える。</p> <p>〔○3カ国とも、豆腐には自国文化が浸透している。 ○3カ国とも、豆腐を健康食品として意識している。〕</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・キーワードを短冊で提示し、ポイントを明確化することによって、児童に理解させる。 ・「豆腐と聞いて思い浮かべるもの」という3カ国（日本・中国・韓国）の人々に対するアンケート結果を提示し、各国の人々の思いや考えを比較させ、それらにあまり差がないことに気付かせる。そして、豆腐という食品は、それぞれの国で健康食品として自国文化に浸透していることを理解させる。
終末	<p>5 本時の学習を通して、思ったこと、考えたことをワークシートにまとめる。</p> <p>〔○国や地域によっていろいろな豆腐がある。 ○豆腐には大豆の栄養よく摂る工夫や食べやすくする工夫がある。〕</p> <p>6 本時の学習のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豆腐は現在私たちにとってどのような食品であるのか。また豆腐に込められた先人の思いをワークシートにまとめる。 <p>〔○豆腐は、日本の食文化に浸透した健康食品である。 ○豆腐には、昔の人の知恵や健康への思いが込められている。〕</p>	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・昔と現在において豆腐はどのような存在か、また大豆を食する工夫にはどのようなものかという視点を与え、児童の思考活動を支援する。 ・写真を提示し、国や地域によって様々な豆腐があることに気付かせる。そして、豆腐が国や地域によって独自の発展をしていることにも気付かせる。また、様々な豆腐の存在を知ることによって、豆腐に対する興味や関心を高めさせる。 ・机間指導しながら、児童の実態を把握し、適宜支援を行う。 ・児童の発表を板書することによって、学習内容を共有化させる。 ・ワークシート、板書を基に、本時の学習を振り返らせる。 ・まとめの短冊を提示し、穴埋の部分のキーワードを考えさせる。その際、キーワードを導く手立てとして、豆腐の由来等に注目させる。

②ワークシート（その１）

ワークシート（総合的な学習の時間）

年 組 名前

「豆腐^{とうふ}について調べよう」

★今日のめあて★

豆腐の歴史

1. 豆腐が生まれた場所と年代について

☆場所： ☆年代：紀元前2世紀（今から 年以上前）

2. 豆腐はどのように日本に伝わったか。

☆ 時代（ ～784年）に の僧侶たちによって伝えられた。

3. 豆腐はどのように日本の食生活に広まったか。

<始めのころ>… たちの間で として食べられていた。

<室町時代>… 社会や 社会に伝わり、全国的に広まった。

<江戸時代>… の食べ物として取り入れられるようになった。

<現在>…高たんぱく低カロリーの食品として広く親しまれている。

名前の由来

☆「豆腐」＝「 」

豆腐の栄養

☆豆腐の原料の大豆は と言われるほど、
多くの をふくんでいる。

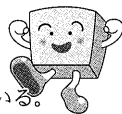
豆腐への思い

☆アンケート結果もさん考にして、今日の学習で分かったことや思ったことを書こう。

★今日のまとめ★

・豆腐は、日本の食文化に^{しんとう}浸透した 食品である。

・豆腐には、昔の人の や への思いが込められている。



③板書計画（その1）

とうふについて調べよう

★今日のめあて★

とうふの由来や栄養について学習しよう。

名前の由来

「腐」の語源→「液状のものが寄り集まって固形状になったやわらかいもの」



「とうふ」＝「やわらかい豆」

とうふの栄養

大豆は「畑の肉」と言われるほど、たんぱく質を多く含む。

とうふへの思い

とうふと聞いて
思い浮かべるもの
(上位3項目)
日本 中国 韓国

- ・3カ国とも、とうふが自国文化として浸透している。
- ・とうふから健康がイメージされている。
- ・3カ国のアンケート結果にあまり差がない。

学習して分かったこと

- ・国や地域によっていろいろなとうふがある。
- ・とうふは大豆を食べやすく工夫された大豆の加工食品である。
- ・とうふは健康食品として広く食べられている。

★今日のまとめ★

- ・とうふは、日本の食文化に浸透した健康食品である。
- ・とうふには、昔の人の知恵や健康への思いが込められている。

【授業者 Y・W の準備状況】

① 学習指導案（その 2）

第 6 学年 総合的な学習の時間の学習指導案

指導者 Y・W

1. 単元 奈良の大仏と人々とのつながりを知ろう。
2. 本時
 - (1) 目標 大仏完成までの流れをつかんだうえで、大仏に込められた人々の思いを考え、理解することができる。
 - (2) 準備 ワークシート、短冊、資料プリント、挿絵（大仏の顔、写真のコピー）
 - (3) 実際

過程	主な学習活動	時間	教師の支援
導入	1 大仏の写真を提示し、学習内容を確認する。 2 今日の目当てを確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">奈良の大仏について調べよう。</div>	5 分	<ul style="list-style-type: none"> 大仏の写真を提示して、それは何か答えさせる。 目当ての短冊を児童に提示し、それを読ませ、ワークシートに記入させることによって本時の目当てを確認させる。
展開	3 大仏の挿絵を基に大きさを考え、発表する。 (1) ワークシートにまとめる。 手 3 m、高さ 15 m (2) まとめたものを発表する。 4 資料のプリントを基に、大仏完成までの流れをつかむ。 (1) 模造紙にまとめる。 <div style="display: flex; align-items: center; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-right: 10px;">つ け く て 計 ら れ た 大 仏 の 顔 は か</div> <div> <div style="display: flex; align-items: center;"> 743年 <div style="margin-left: 5px;">計画</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;"> 2年間 <div style="margin-left: 5px;">実施</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;"> 745年 <div style="margin-left: 5px;">完成</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;"> 7年間 <div style="margin-left: 5px;">完成</div> </div> <div style="display: flex; align-items: center;"> 752年 <div style="margin-left: 5px;">完成</div> </div> </div> </div>	35 分	<ul style="list-style-type: none"> 大仏の目と口と耳の挿絵を提示して、それを基に他のパーツの大きさを考えさせる。 児童の発表を聞き、実物大の顔のパーツを提示することで、実際の大きさに気付かせる。 大仏完成までの資料を配布して、その資料を基に考えさせ、そしてそれを模造紙の空欄に記入させる。 → 答えを模造紙に記入させる。 実際の数に気付かせる。

	<p>5 先人が大仏にこめた願いを考え、発表する。</p> <p>(1) ワークシートにまとめる。</p> <p>(2) まとめたものを発表する。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・学習したことを基に先人の願いを予想させ、ワークシートに記入させる。 ・予想しにくい児童には資料プリントを読ませ、時代背景を知ることによって先人の願いを考えさせる。 ・数人に黒板に記入させ、発表させる。
終末	<p>6 ワークシートに感想を記入する。</p>	5分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の感想をワークシートに記入させる。

② ワークシート（その2）

奈良の大仏と人々との つながりを知ろう

6年（ ）組 名前

目当て

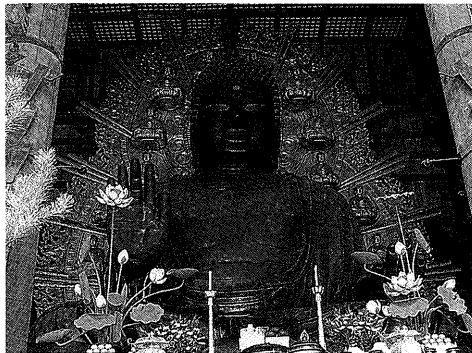
☆どれくらいの大きさだろうか。

目……約 1 m

耳……約2.5m

口……約 1 m

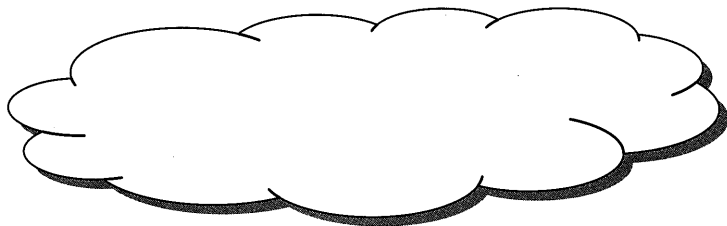
手…… m



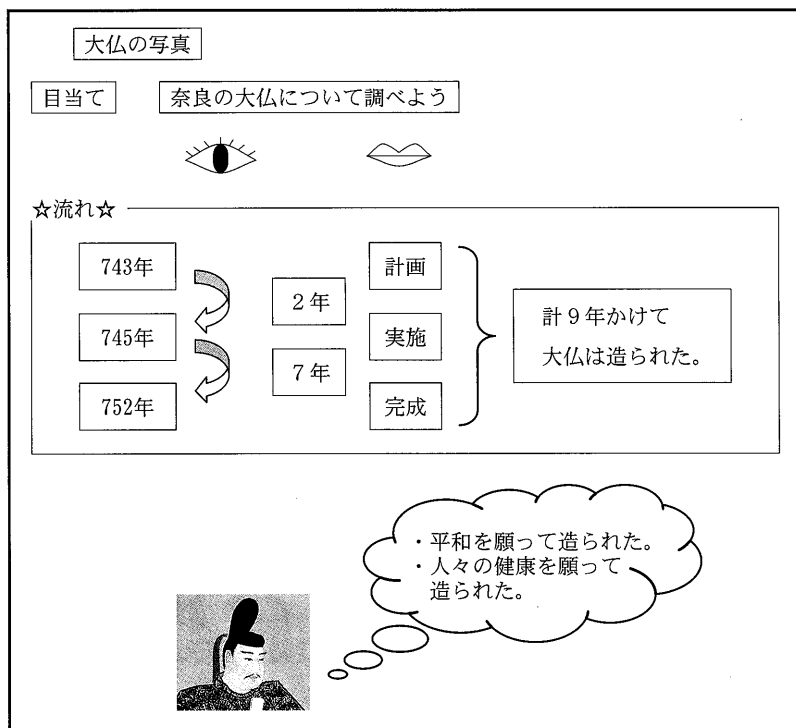
高さ…… m

☆どうしてこんなに大きな大仏をつくったのか。

☆今日の授業の感想を書いてみよう。



③板書計画（その2）



〈授業者Kと授業者Y・Wの模擬授業の準備状況に対する生野の考察〉

●学習指導案について

- ・「目標」について ― ここでは、四者の観点を踏まえて、学習者に習得させる内容を具体的に記すことが重要である。ここに掲げた学習指導案は理解や思考等の観点より目標を述べている。
- ・「準備」について ― 本時の目標を達成するために必要な教材を具体的に掲げている。
- ・「実際」について ― 表の形式で本時の学習の全体像を述べている。「導入→展開→終末」と最も基本的な流れを述べている。「時間」は、活動の節目に入れている。「主な学習活動」の部分では、目標に迫るための順序を過程に沿って、学習の活動を述べている。「導入」の段階では、その1は「前時の学習を振り返る。」と「本時の学習の目当てを確認する。」の観点より述べ、その2は「今日の目当てを確認する。」の観点より述べている。いずれの導入も本時の目標を達成するために中核となる内容を学習の目当てとして設定しているところにその特色が認められている。「展開」の段階では、「目当てについて考える。」という観点より述べている。いずれも目当てを解決するための具体的な活動を述べ、新しい学習の段階の様相であることが分かる。「終末」の段階では、「本時の学習を整理する。」という観点より述べている。その1は学習内容を板書事項によってまとめるというところに、その2は本時の学習をワークシートにまとめるというところにそれぞれ特色が認められる。「主な学習活動」を支援する「教師の支援」の部分では、学習活動について指導上、特に注意する点や思考活動を誘発するための留意点を述べている。加えて、準備した教材の利用についての留意点も述べている。まず、前者の留意点の具体例を見てみる。その1においては、学習活動の3の場面において大豆についての栄養を「畑の肉」という喩えた言葉より理解させるために、他の食品を喩えた言葉「海のミルク」〈カキ〉や「森のバター」〈アボガド〉等を手掛

かりとさせている。ここでは、思考の場を設定し、学習者に理解せしめようとしている。その2においては、学習活動の3の場面で大仏の大きさに気付かせるために、実物大の顔のパーツを提示し、それを手掛かりとさせている。

次いで、後者の留意点の具体例を見てみる。その1においては学習活動の5の場面でワークシートにまとめさせたり、写真を提示し、それを参考にさせたりと準備した教材の利用の方途について触れている。その2においては、学習活動の4の場面で資料を配布し、それを基に黒板に貼付した模造紙に記入させると準備した教材の利用の方途について触れている。

●ワークシートについて

- ・ワークシートは、個々人の学習活動を意識的に行わせ、そして個に応じてその能力を発揮させるものである。また、学習者がまとめたワークシートはその後の学習の場で個々の学習を全体の交流の場に生かし、相互啓発し合うものとなる。斯様なことに鑑み、両者のワークシート（その1、その2）に目を転じてみると、いずれも学習者が課題にしたがって個々で思索をめぐらし、そしてそれを整理するよう工夫していることが分かる。また、ワークシートは教師にとっても授業を展開していく上でとても有効な資料となり得る。教師がワークシートによって個々の学習の実態を把握することができれば、それは個別指導や次の学習の方向や手順を考察する際の重要な資料となり得るからである。斯様なワークシートは、実際の学習活動の場で生かすことが期待される。

●板書計画について

- ・板書は、教育機器の発達した現在においても教室で行われ、授業において極めて重要な視覚メディアである。例えば、発言や発問の要点を

学習の流れにしたがって板書することで、学習活動の道筋が記録され、またそれは授業の整理の段階で学習を振り返り、重要事項を確認することにも役立つのである。斯様なことに鑑み、両者の板書計画（その1、その2）に目を転じてみると、いずれの板書も導入の学習の目当ての設定より、探究した内容の整理、そして終末での学習のまとめという流れになっていて学習の道筋が分かるように計画されていることが分かる。加えて、短冊、模造紙、挿絵等を使用し、学習者に分かり易いように構造化しようとしていることも分かる。

〈模擬授業の授業記録〉（授業者Kのその1、授業者Y・Wのその2）

①授業者Kの授業記録（その1）

【導入】

T では、授業を始めます。日直さんお願いします。

T まず、みんなワークシートが一枚あるか確認して下さい。ある人は名前を書いて下さいね。

T みなさん、前回学習したことを覚えていますか。前回は豆腐の歴史について学習しましたね。今日はまずワークシートに穴埋め問題があるので、それをもとに豆腐の歴史を復習しましょう。忘れてしまった人は資料プリントの「豆腐の歴史」というところにヒントが書いてありますので、それを見ながら考えてみて下さい。

T では、質問します。豆腐が生まれた場所はどこでしたか。

C 中国です。

T そうでしたね。豆腐が生まれた場所は中国です。

T では、豆腐が生まれたのは今から何年くらい前でしょうか。

C 2000年以上前です。

T その通りですね。豆腐が生まれたのは紀元前二世紀ですから今から2000年以上前です。

T では、今から2000年以上も前に中国で生まれた豆腐が、日本に伝えら

れたのは、いつの時代で、誰によってでしょうか。ワークシートの空欄に答えを入れて読んでみて下さい。

C 奈良時代（710年～784年）に遣唐使の僧侶たちによって伝えられた。

T はい、よくできました。奈良時代の年号は紙芝居では出てきませんが、社会の歴史の授業で奈良時代は「なんとみごとな平城京」という語呂合わせで覚えましたよね。

T 次は、どのように日本の食生活へと広まっていったのか、時代を追って見てみましょう。まず、日本に豆腐が伝わってきた最初の頃の様子を空欄に入れて読んでみて下さい。

C 僧侶たちの間で精進料理として食べられていた。

T そうですね。

T 精進料理ってどんな料理なのか分かりますか。

C 精進料理は肉や魚介類を使わないで、植物性の食べ物だけで料理したもの。

T では、次の室町時代の様子をお願いします。

C 貴族社会や武家社会に伝わり、全国的に広まった。

T そうですね。次は、江戸時代の様子をお願いします。

C 庶民の食べ物として取り入れられるようになった。

T はい、そうですね。

T ここまで、前回学習した豆腐の歴史について復習しました。今日は、豆腐の由来と栄養を中心に学習していきたいと思います。

(めあての短冊の貼付)

T では、今日の日当てをみんなで一回音読しましょう。さんはいい。

(全員によるめあての音読)

T はい、よく読めましたね。では、この日当てをワークシートの一番初めの四角の中に入れて下さい。書いた人は、鉛筆をおいて前を向いて下さいね。

C (ワークシートに記入)

T （資料プリントの配布）

T みんなが目当てを書いている間に今日の学習で使うプリントを配りました。みんな、ありますか。ある人は名前を書いて下さいね。

【展開】

T では、まず豆腐の名前の由来について学習していきます。由来という言葉は少し難しいですけど、物事の始まりという意味です。

（短冊の貼付〔名前の由来〕）

T 資料プリントの上の段の終わりの方の名前の由来Aというところを読んで下さい。

C （指名音読）

T はい、ありがとう。よく読めました。まず、「豆腐」という文字をみていきます。

（板書〔豆腐〕）

T 「とうふ」は音読みですが、訓読みだとどうでしょう。誰か分かりますか。

C 豆がくさる・くさった豆。

T そうですね。「腐」はくさると読みます。まだ習っていない漢字ですがよく読めました。でも、これが名前の由来だとちょっとおかしいですよ。納豆なら納得できますけど、豆腐は腐っていませんからね。そこで、由来にたどり着くために、「腐」の語源を考えてみます。「腐」の語源は資料プリントには何と書いてありましたか。

C 液状のものが寄り集まって固形状になったやわらかいもの。

（短冊〔「腐」の語源〕）

（挿絵の貼付〔大豆くん、豆腐くん〕）

T そうですね。これで分かりましたよね。つまり、「豆腐」はくさった豆ではなく、簡単に言うとどんな豆でしょうか。

C やわらかい豆。

T そうですね。豆腐はやわらかい豆という意味だったんですね。では、それをワークシートに書き込んで下さい。

(板書 [やわらかい豆])

T もう一つここで考えてみましょう。硬いものと軟らかいもの、みなさんは、どちらが食べ物として食べやすいと思いますか。二択で質問します。

T 硬いものだと思う人手を挙げて下さい。

(挙手なし)

T 軟らかいものだと思う人手を挙げて下さい。

(全員挙手)

T そうですよ。軟らかいと食べやすく、消化吸収もよいという利点があります。こういう長所に昔の人は目をつけて、豆腐を作ったんですね。

T では、次に豆腐の栄養についてみていきます。

(短冊の貼付 [豆腐の栄養])

T 豆腐の原料の大豆に多く含まれる栄養素は何でしょう。

C たんぱく質。

T そうですね。たんぱく質ですね。それでは、たんぱく質を多く含んでいるために、喩えられている言葉があります。分かりますか。

C (分からない様子)

T では、資料プリントの下段の豆腐の栄養の部分を読んで下さい。

C (指名音読)

T はい、ありがとう。よく読めました。今、〇〇くんが読んだところに、大豆を喩えた言葉があったのですが、分かるかな。

C 大豆は畑の肉。

T そうですね。大豆は畑で採れる野菜だから「畑の」ですね。そして肉のように多くのたんぱく質を含んでいますので「畑の肉」なんですね。では、ワークシートに畑の肉とたんぱく質を書き込んで下さい。

T では、アボガド(カキ)を喩えた言葉もあるのです。知っていますか。

C ……

T 難しいですね。アボガドは「森のバター」 カキは「海のミルク」と言われています。

T それと前回、豆腐の歴史を学習した時に、中国から豆腐を日本に伝えたのは遣唐使の僧侶で、最初の頃は僧侶たちの間で精進料理として食べられていたと話しました。ここで、豆腐の栄養と関連した質問をします。なぜ僧侶たちが豆腐を食べるようになったのか、その理由が分かりますか。

T ヒントは、精進料理です。精進料理がどんな料理だったのかを考えると分かりますよ。

C 僧侶は肉や魚を食べなかったから。

T そうです。僧侶は修行の一環として、肉や魚を使わないで植物性の食物だけを食べていたのですね。だから、その中で、硬い大豆を食べやすくした豆腐は、貴重なタンパク源だったのですよ。

T では、次に「とうふと聞いて思い浮かべるもの」というアンケート結果見てみます。

T この黒板のアンケートは日本・中国・韓国のネットユーザーを対象として行われました、JRM生活総合研究所の調査結果です。この結果からどんなことが分かりますか。 また、またどんなふうに思いますか。

C 豆腐から健康が連想されている。

C ……

(板書)

T そうですね。

T 資料にもありますように豆腐にはいろいろな種類があります。たくさんあって紹介しきれないのですが、今日は二つの発酵豆腐の写真をもってきました。まず、こっちは中国の豆腐です。こっちは沖縄の豆腐ようです。

【終末】

〈以下略す。〉

①授業者Y・Wの授業記録（その2）

【導入】

T では、授業を始めたいと思います。日直さん号令お願いします。

C 起立、礼、着席。

T 今日は皆さんが社会科の授業で勉強したこんなものについて詳しく勉強したいと思います。

（奈良の大仏の写真を提示）

皆さん、これが何だか覚えていますか。

C 大仏。

T はい、そうですね。皆さん、この大仏がどこにあるか覚えていますか。

C 奈良。

C 鎌倉。

T これは奈良の大仏です。鎌倉にも同じような大仏がありますよ。でも皆さんが授業で勉強したのは、奈良の大仏でしたね。それで、今日は奈良の大仏について皆でもっと詳しく勉強したいと思います。では、今日の目当てを確認したいと思います。

（目当ての短冊を提示）

皆で一度読んでみたいと思います。せーの。はい、皆さんよく読めましたね。では、ワークシートに目当てを書き写してみてください。もしワークシートと資料プリントが配られていない人がいたら手を上げて下さい。ワークシートにはきちんと名前を書いておいて下さい。書き終わった人は鉛筆を置いて下さい。

【展開】

はい、皆さん書き終わったようなので、勉強を始めたいと思います。ま

ず皆さんに質問です。この大仏はいったいどの位の大きさでしょうか。考えてみましょう。耳、口、目の大きさは、ワークシートに書いてある通りです。皆に私から、ヒントを出したいと思います。皆さん、黒板に注目して下さい。

（大仏の目と口の挿絵を提示）

実際の大仏の目と口はこの位の大きさです。皆の目や口の何個分の大きさでしょう。それでは、大仏の手の大きさと大仏の高さを予想して、ワークシートの空欄を埋めてみて下さい。

（机間指導）

T では、誰かに発表してもらいたいと思います。Aさん、どの位だと思えますか。

C 10メートル。

T では、実際の大きさを確認したいと思います。

（短冊を提示）

T 答えは15メートルです。手の大きさは3メートルです。どうですか。皆の予想は当たりましたか。15メートルと聞いて皆さん想像することができますか。これは、三階建てのビルと同じくらいの高さです。大仏がもし立ち上がることができたら、十階建てのビルと同じ高さになります。皆さんのいるこの建物よりはるかに大きいということですね。では、ここで一度大仏の歴史を振り返ってみたいと思います。

（年表を提示）

今から約1200年前の743年に、聖武天皇が大仏造立の詔を発しました。これは、大仏をつくろうという計画です。そして、それから2年後、ようやく大仏造りが開始されました。そこからさらに7年後、ようやく大仏は完成しました。ここで、また皆さんに質問です。昔の人はどうしてこんなに大きな大仏を造ったのでしょうか。みんなで予想してみましょう。思いつかない人は資料プリントを読んでから考えてみましょう。

(机間指導)

T では、何人かの人に発表してもらいたいと思います。はい、Bさん。

C はい。国の平和を願って造ったのだと思います。

T そうですね。きっとそういった願いがこめられているかもしれませんね。はい、じゃあもう一人、聞いてみたいと思います。Cさん。

C はい。みんなの健康を願ったのだと思います。

T なるほど。そうですね。だから、こんなに大きい大仏を造ったのかもしれないですね。実際に昔の人に聞いてみたいけれど、残念ながらそれは出来ません。でも、こんな資料が残っているので読んでみたいと思います。きっと聖武天皇は、自分の国の平和と人々の穏やかな生活を願い、仏教の力を借りようとしたのですね。私たちは、これだけの年月をかけて造られ、そして、多くの人々の願いがこめられた大仏をこれからも大切にしていかなければいけませんね。

【終末】

(以下略す。)

〈受講者Kと受講者Y・Wの模擬授業の授業記録に対する生野の考察〉

- 上記の模擬授業の授業記録を基に以下に考察を加えてみる。両者の授業記録（その1、その2）を一覧して気付くことは、いずれも導入の段階における動機付けと展開の段階における思考活動を重要視していることである。

まず、前者の動機付けの様相を見てみる。授業者K（その1）は、導入の段階で「前時の学習内容の想起→本時目当ての設定」という流れで、学習を組織している。既習内容との関わりで本時の目当てを設定している立場は、学習者の意欲を喚起する点より考えても望ましいことといえよう。しかし、授業者Kも指摘している如く「前時の学習内容を想起」させる場面では指導内容を精選して学習を組織する必要があったように

思える。授業者Kは「前時の学習内容を想起」させる場面においては、「資料を読んでワークシートの空欄に解を記入する。」「空欄の解を発表し合う。」「解を記入した部分を読む。」等の三者のことを二回に亘って（一回目は「豆腐が生まれた場所」「豆腐はどのように伝わったか。」という内容で、二回目は「豆腐はどのように日本の食生活に広まったか。」という内容である。）行っている。授業者Kの学習指導は前時の学習指導の上に成り立っていることを考えると、前時の学習内容を学習者に想起させることについては論を俟たない。斯様な認識のもとに授業者Kは学習を組織しているのであるが、実践の場では導入に10分間を費やしてしまった。導入の段階では、学習者に如何に本時の目当てを意識付けるかということが重要である故、先に指摘した如く前時の学習内容の確認は、必要最低限とし本時の目当てへ結び付けるという学習を組織していくべきであろう。斯様な改善点はあるものの学習者の興味や関心は十分喚起されている。一方、授業者Y・W（その2）は、導入の段階で「学習内容の確認→今日の目当ての確認」という流れで学習を組織している。ここでは、本時の目当てへと繋ぐ際、嘗て他の教科で学習した内容であることを学習者に伝え、そして写真を提示し、その名称を問うて学習の目当てを設定している。既習内容（他教科）と関連付けて、学習者の興味や関心を喚起し、目当てを意識付けている点は良好である。以上は、本時の目当てを提示する直前段階における指導の様相における考察である。次いで、本時の目当ての意識付けの様相を見てみる。いずれの授業者（KとY・W）も、まずは目当てを短冊で提示し、そしてそれを音読させ、最後にワークシートに記入させている。ここでは、短冊によって学習者に視覚的に訴え、そしてそれを音声化させて意識付け、更に思考を伴った書く作業等によって目当てを確り定着せしめようとしている。視覚、音声化、表現等の活動によって学習者の意識は高揚すると考える。

次いで、後者の展開の段階における思考活動の様相を見てみる。授業

者K（その1）は、学習活動の3の場面において大豆についての栄養を「畑の肉」という喩えた言葉より理解させるために他の食品の喩えた言葉、「海のミルク」（カキ）や「森のバター」（アボガド）を手掛かりとさせるとして思考の場を設定している。しかし、授業記録を見てみると、その展開は、以下のようになっている。

「T　じゃあ、資料プリントの下段の豆腐の栄養のところを読んで下さい。」

C　（指名読み）

T　はい。ありがとうございます。よく読めました。今、読んでもらったところに、大豆の喩え言葉がありましたね。分かりますか。

C　大豆は畑の肉。

T　そうですね。大豆は畑で採れる野菜だから「畑の」ですね。そして、肉のように多くのたんぱく質を含んでいますので「畑の肉」なんです。では、ワークシートに畑の肉とたんぱく質を書き込んで下さい。

T　じゃあ、アボガド（カキ）を喩えた言葉もあるんだけど知っていますか。

C　……

T　難しいですね。アボガドは「森のバター」、カキ「海のミルク」と言われています。」

ここでは、「大豆の『畑の肉』という喩えた言葉」は、提示した資料を基に気付かせ、そしてそれについて説明を加えている。次に、「アボガド」（カキ）の喩えた言葉を学習者に問うているが、しかし学習者より解が得られなかったため、指導者が解を言っている。それは、実際の学習指導案の展開と異なっている。ここでは斯様なことより、学習者に十分思考させるための場の構成や発問の仕方を改めて検討することが必要となるであろう。授業者Kも斯様なことは指摘している。授業者Y・W（その2）の思考の場をめぐっては割愛する。

Ⅲ 実践的指導力の基礎の育成をめぐる

－まとめにかえて－

模擬授業の実践を試みて、受講者である学生の実践的指導力の基礎が如何に育成されたか、以下にその様相を見てみる。（受講生Kの「総合演習」のポートフォリオより抜粋）

「今回初めて自ら授業設計をし、模擬授業を行った。実際に模擬授業を体験してみて気付くことや学ぶことが大変多くあった。

まず、自分の模擬授業の反省点から考えてみる。第1は、1単位時間内での学習者へ提示する内容の焦点化が不十分であったことが挙げられる。導入段階では、まず既習内容についての確認を資料を読ませながら作業させ（ワークシートの空欄補充）、次いでその解を発表させ、最後に学習者に解を入れさせながら音読させた。ここでは、想定時間（5分）以上の時間を要してしまった。既習内容を模造紙にまとめて提示したり、既習内容を紙芝居によって想起をさせたり等ともっと簡潔に前時の学習から本時のめあてへと繋げる工夫が必要であった。導入においては、児童に前時の想起をさせることの意図は本時のめあてへ如何に繋ぐかということである。ここではもっと学習のポイントを焦点化し簡略化して提示することで、その意図は十分果たせたのである。このことから授業展開の時間配分を含めた授業の構成力や、目標達成のための提示する学習内容の焦点化の必要性を学んだ。＜中略＞第3として、学習者の言葉を上手く引き出せなかったことが挙げられる。それは、教えたいという思いが前面に出てしまった結果、学習者の思考を促すことが不十分なままに、自らの答えをいってしまった場面があったことである。一つは、豆腐の栄養について理解させる際、資料を読ませてそこから解を導き出した場面である。今一つは大豆を喩えた言葉「畑の肉」を理解させるために「海のミルク」「森のバター」

を手掛かりとして提示する際、「カキ（アボガド）を喻えた言葉は何でしょう。」という発問をし、そのヒントを与えたものの、学習者から解が出てこなかったのも、自らが解を言ってしまったという場面がある。＜中略＞このようなことから、学習者に思考させ、そこから学習者自身の言葉を引き出すことの難しさを痛感し、同時に学習者の実態に応じた教師の発問の重要性を学んだ。

次に、模擬授業の準備過程において学んだことを述べる。まず、教材研究に関して、探究（研究）したことの総ての内容を学習者に提示するのではなく、学習者に学ばせたい内容を焦点化する必要があるということを学んだ。学習者に学ばせたい内容を焦点化するという教材研究は、教材研究を簡略化するという意でなく、学習者に学ばせたい、思考させたい内容を精選し、それを構造化する作業のことである。換言すれば、それは学習者の視点で教材を分析していくことの重要性を言っているのである。また、このことはワークシートや資料プリント等の教具を作成する際にも通じるのである。

以上のように、私は教師にとって必要な力量について多くのことを学んだ。加えて、授業実践における自分の未熟さを認識することで、その改善の方途、つまり現在私自身がやるべきことが明確になった。今後、学んだことを生かしながら実践的指導力の基礎を培って行きたいと考える。』（授業者K）

抜粋した受講者Kのポートフォリオを見ると、授業設計力と授業実践力に関する内容がいくつか認められる。例えば、受講者Kは授業を設計する力をめぐって、教材を分析する力、教材、教具、資料等を準備する力等に触れ、そして授業を実践する力をめぐって、受講者Kは授業への動機付けをする力、学習者の思考を深めるために手立てを講じる力、学習者の実態に応じて発問を工夫する力、教材、教具、資料等を学習者が着目するように提示する力等について触れている。

以上、見てきたように、受講者である学生は授業を計画する力や授業を実施する力等の一端を指摘し、そのような力量を教師は身に付けておく必要があるとする。授業設計力や実践力といえば、受講者が指摘したもの以外にもまだ他にもいくつか存在する。斯様な事項にも受講者の目が向くような「総合演習」の授業のあり様を検討していくことが今後の課題の一つであろう。

今回の模擬授業では、教える立場と学ぶ立場の両者の視点で授業を行うことできた。斯様な体験を通して、受講者である学生は実践的指導力の基礎となる授業設計力や授業実践力の重要性を認識し、その力量の一端を捉えることができたように思う。

（本学教育学部教授）

（宮城学院女子大学教授）

（埼玉県新座市立第二中学校教頭）

（本学教育学部教授）

（鹿児島大学教育学部教授）